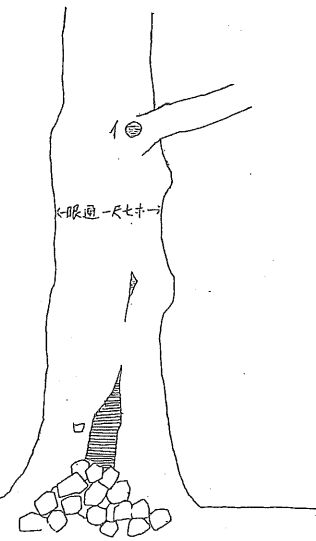


山寺のとまりとアラバツクの巢

森 田 淳 一

毎年五、六月の頃になると、身體の元氣が幾分衰へて、冬の間のやうには仕事出来なくなるのが私の常である。此時分に、實驗室や書齋での仕事を餘りしないやうにして、野や山に遊び、動物や植物と親しみ、殊に、鳥の振舞を觀たり、聲を聞いたりして、茲二三年暮して居る。そして、さうする事は私の楽しい事の一つである。山寺に泊つて、山椒の佃煮、眞竹の細い筍の煮菜、山で出來た細莖の蕨の雜菜、時には、一緒に煮られた野菜の灰汁で淡墨色に染つて居る高野豆腐等、殆んど精進に近い料理で御飯をいたゞく事は都會人の臭氣を一度に拂ひ淨めるやうな氣がして嬉しい。殊に、朝起きて、ホトトギスやウグヒスを聞いた後で、オホルリやサンセウタヒの聲を聴きながら、洗面所ならぬ縁端で、或時はすが／＼しい樹の下で、殊更冷く感ぜられる山の滴水で手水を使ふ事は格別の洗禮である。

かうした山寺行脚は只一人でする事もあるが、榎本佳樹氏と二人ですることも屢ある。私だけでは判らない鳥の名も榎本さんの説明に依つて判り、諸々の鳥のローマンスも其折々に榎本さんに依つて説明される。



第一圖 モミヂの古木。三空洞入口。空洞入口(○)の徑徑四寸餘。空洞入口(□)の上下徑一尺五寸(小石の上端より測れば一尺)左右徑一尺七寸。鳥の出入は口からする。一尺八、九寸、モミヂの木の根徑徑一尺七寸。鳥の出入は口からする。

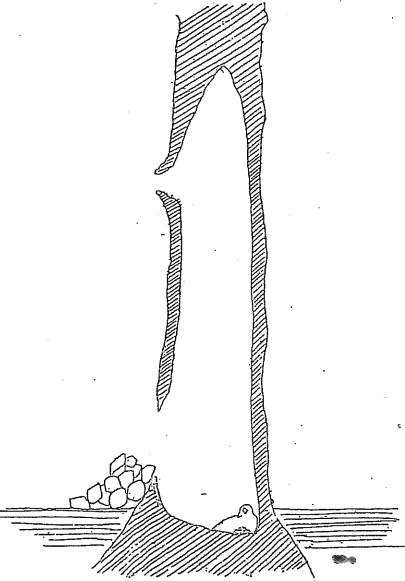
今年特別忙しくつて、五月、六月の氣の進まぬ時分にも、實驗室に、或は臨海研究所に暮してす暇なかつたが、やつとの事で、六月廿六日の夜、久方ぶりに、榎本さんと一緒に、山寺の泊りを味ふ機會を得た。

大阪府中河内郡枚岡村髮切山の慈光寺は昔からホトトギスの聴きどころと云はれて居るが、今年此寺の庭のモミヂの樹の洞でアラバツクが巢をした(と言つても、只、洞に卵を産むだけと云ふ事は周知の通り)のを觀に行つたのである。(第一圖)

アラバツクは通常雌が抱卵するが、時には雄が補的に抱卵する事があると云ふ事である。此鳥のやうに、雌雄の二次特質に差のないものでは、雄も時に抱卵すると云ふ事は有り得る事であらう。私には其雌雄を確める事はしなかつたが、假りに、卵を抱いて居るものを雌、附近の枝にとまつて見張をすると云はれるものを雄として記載を進めて行く。

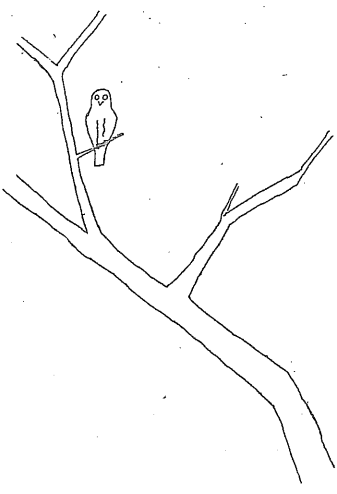
廿六日の夕方は雌は卵を抱いては居なかつた。色の白い卵が三個あつた。卵の見つかつたのは六月十二日であるから、此時已に少くも二週間を経過して居る。雄も、雌が卵を抱いて居る間、常にまつて見張すると云ふ枝には居なかつた。時に午後七時半。雌も雄も食事に行つて居るのであるらしい。卵は觸れて見て冷たかつた。一般に鳥の卵は少々加温をサボつても、若し抱卵後相當の日時を経過して居るならば、即ち胚が相當に發育して居るならば、特別の害

が無いかのやうに思はれる。私の實驗室で、嘗て電燈線の故障の爲めに、一晝夜、丸廿四時間連續して、孵卵器が室温並に放つて置かれた事がある。それは昨年十月中旬であつたから夜は十二、三度迄



第二圖 モミヂの空洞縦斷概略圖。空洞の奥、外部の土地よりは五、六寸下なる底面に接して親鳥三羽を抱く。空洞、入口には以前から徑三寸の小石三四十個地上二尺の高さに積まれてあつた。樹木。三土地。

も下つた筈であるのに、抱卵十二日及十三日の鶏胚は半分(四例の中二例)生き残つた。之に反し抱卵一日のものは五例全部死し、六日及び八日のもの合せて三例も全部死んだ。發育初期の胚が發育の進んだものに比して死亡率の大きかつた理由は、温度の急激な變化に依る發生の不調和に對する抵抗力が未だ充分出來て居なかつたためであらうか。それはさておいて、卵を温める事を中斷する事に依つて、其瞬間、發育速度を遅緩させ、時には其ために、細胞組織間の調和が破れて害の有り得ることは言ふ迄もない事であるが、時々、



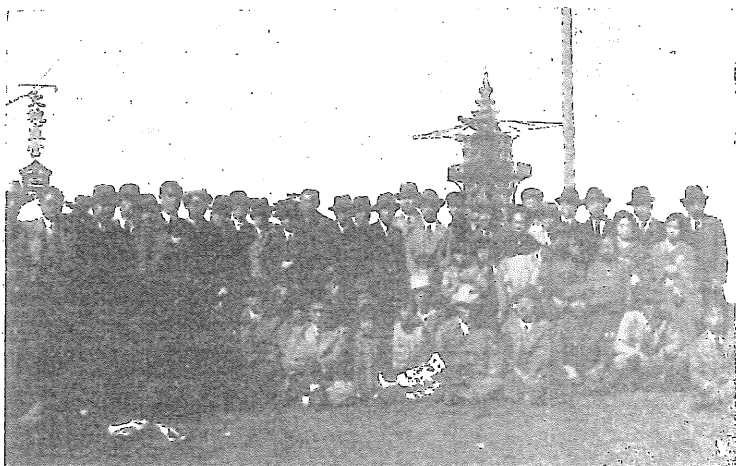
第三圖 巢の附近のモミヂの樹。配偶者の見張。モミヂの葉を盡くのを略した。

軽く中斷する事は一般には害のないところでなしに、却つて良い事であるらしい。鶏の孵卵家は、孵卵器を通常三十八、九度に保つておいて、日に一回、三十分位は孵卵器の外へ卵を出して、或程度温度を下げるさうである(私の實驗室でも孵卵には常にさうした工夫をして居て成績がよろしい)。鳥の體温(四十度前後)は原形質の活動するのに先づマキシムに近い温度であるから、胚の細胞や組織の増殖分化も至極盛に進んで居るに違ひない。だから、どうかすると酸素の缺乏を來すものと考へられる。此缺乏を補ふには酸素の供給を多くする事は勿論良い事であるが、若しそれが出來ないとすれば、温度を下げて原形質の活動を鈍らせるに限る。孵卵家が定期的に卵を外に出して或程度冷し、野の鳥が時々抱卵を中止するのは、直接には酸素の供給と云ふ事と、間接には温度を下げる事に依つて酸素の消費を節約すると云ふ事との二つの効果があるのだからうか。温度と云ふ刺激を連續的に與へず、間歇的に與へて、却つて發育を促進すると考へられぬでもないが、寧ろ、今述べた點が主でなからうか(此等の事に就いては、已に、立派な仕事があるのかも知れないが、其事を調べる暇なく、只頭に浮んだまゝを書いた。御許しを乞ふ。話は元へ戻つて、翌日午前八時過、雌は卵を抱き、私達が覗き込めば警戒の眼をみはり(第二圖)、雄はいつもの見張場所、即ち、巢から四間餘離れた他のモミヂの樹、地上約四間の高さの枝にとまつて居た(第三圖)、そして下行く人につけて顔を動かせる動作

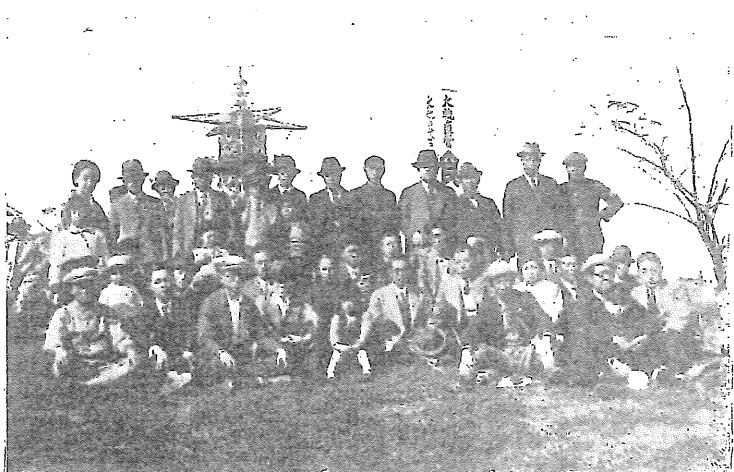
夫道松平

記のる見を網霞に山駒生

見學會一行A班(岡田稔撮影)



見學會一行B班(岡田稔撮影)



が目立つた(此日、午前五時には雌は巢の中に居て、雄はいつもの枝に見えなかつた)。

此寺のアヲバツクは、地上すれ／＼にある空洞、而も其底が地の平面よりも五、六寸も下にある空洞を巢にして居る。其樹から二、三尺隔つた所は寺の野茶畑で、何かを植ゑるために耕されてある。寺男が其處で仕事を居ても飛び立たずに抱卵して居ると云ふ事であるし、晝間、私達が覗いても飛び立たない。私の村の、宮の鳥居の側の楡の古木で嘗て、アヲバツクが巢をした事があるが、其時は卵五個、地上約三間の高さにある洞であつた。此時も鳥居の側だから相當に人の通行があつたが、逃げもしないで雛をかへした。アヲバツクのかうした人眼をあまりさけない態度は、主として、此種の鳥の眼の特殊構造(暗光には感じても、明光には感じ得ない)に原因して居るのではあらうが、初夏の夕方のある人懐っこいやうな呼聲と共に、一層可愛さを増す鳥である。又、鳥は通常、あまり高い所に巢を作らないのみならず、樹間に棲む鳥でも、地上に巢を営むものも少しはあるやうである(例アヲジ)が、アヲバツクのやうに、時によるとこんな迄地において産むと云ふ事には、私は興味を感じず(但し、アヲバツクとしては、庭石の間とか、材木を重ねた地上に産卵する事のある事は、稀ではあつても、あながち珍しい事ではないと云ふ事である)。此記事を書くのに榎本さんから有益な助言をもらひ、慈光寺住職横尾智道氏に種々御世話になつた。御厚志多謝。

十一月十四日、晴後曇。大軌電車の好意に依る山上直通電車で生駒山頂に到着した一行は八十名餘。翠色の會旗は先頭で微風にはためいてゐる。澄んだ青空に浮び出ようとする陽光は次第に明るさを増して来る。攝津、河内の平野は足下に籠に包まれ、雲海遠く右には六甲北嶺の連山が、左に頭を廻せば大和の山山が群青に一はけ塗られ、巍然として聳え立つてゐる。

守山氏鳥屋場見物についての説明があつて、八代龍王社の傍から左へ、朝露に濡れた滑り易い額田道を草の根に紐つて下る。左右の林中ではメジロ、ウグイス、ホホジロ、四十雀、山雀、エナガの朝の歌が流れて来る。青鴉はチッチー／＼と鳴き乍ら藪から藪へと餌を探し、カハラヒワは松の梢で友を呼んでゐる。約十分も歩を進めた頃遙か下方の雑木林からギョロン、ギョロン、ツーと良く轉る囀りが耳に入る。一行の気分は益々爽かになつて来た。守山幹事の先日來の手配で杣道の藪が刈取つてあつた事は、御夫人連の裳を露に濡さなかつたと言ふ喜びばかりではなかつた。囀の轉鳴はいよ／＼近くなつた。鳥屋場だ。素朴そのものの様な鳥梅爺は老嫗と息子迄加へて、多い會員に目をパチ／＼させて迎へて呉れた。鷓が判らぬと云つて早速榎本先生を煩してゐた。金澤邊りの鳥屋場では一朝に多數獲れることもあるといふこの鳥も生駒に渡る事は少いものと見える。待つ程もなく鶉がかかつた。カメラのシャッターが一齊に切られる。網にかかつた鳥は老爺が足からほぐして羽、頭と上手にはづし、境遇の突然の變化に心臓の鼓動も聞きとれる様な鶉は

會員の手から手へと野鳥の暖かさを傳へてゐた。アトリとアラジがかる。

多數の人で流石の囀も感づいて来たか轉りも低くなつた。珍らしさうに網に手を觸れる人、生かしてある小鳥に見入る人、藪蔭から藪へ會員の希望と好奇心とは無限に擴がつて行く。九時過ぎ數十羽の鶉の群れが現れたが、人の姿を見付けたものか向ふの谿へ渡つて了つた。豫め用意の獵鳥は二羽宛網に入れて會員に配布された。大部分は鶉で白腹その他も混つてゐた。鳥籠を掲げて來られた人々は鶉、青鴉、アトリ、頭高等好みの鳥を手に入れるのに忙がしく、イカルや眞鶉のとれない事も淋しがつてゐられた。鳥屋場の視察も終つて山頂遊園地に引き返り榎本先生の指導で鳥體生理研究の意味も加へて各自毛をむしりとつた鶉は、晝食の膳を賑はすべく大軌食堂へ運ばれた。注ぐ陽光を背一杯にうけて三々五々芝生の上に圓陣を作り、榎本先生の渡鳥に関する講話に聴き入つた。久し振りに出席の森田支部長も今日はニコ／＼してゐられる。小山屋で味づ程の良い味は出なかつたが、始めて羽毛をむしつた方の食膳の上の焼き鳥の御感想でも伺つたらと思ふうち中食も終り、記念撮影もすまし、航空塔下を通つて信貴生駒縦走路を南へ、暗峠から杜鵑の名所慈光寺へ。同寺住職、會員榎尾氏の澁茶の饗應も嬉しく、アラバツク地上營巢の話等を森田博士にきく。陽も斜角を増すので腰を上げて寺を辭去したが、年古りた老杉の下、道の傍に立ててあつた野鳥愛護の標札も、中西先生が此の夏來訪の際守



社門にて慈光寺名所野鳥愛護会。パツクは本會の野鳥愛護隊員(岡田修撮影)

山氏と建てられたものだといひ、なつかしく眺めた事であつた。参加者中にはこの種の催を大變喜ばれて、次回はどこです、何をやりますと質問される人が多い。一隊は枚岡へ、他の一隊は鳥屋場を訪ね、遅れた一隊は寺で疲れを休め、鳴く鳴とこほれ咲く野菊に秋をひし／＼と感じ乍ら明日への希望を胸深く秘めて山路を下り、枚岡神社に参拝した。この附近が府立の森林公園となるので、神武天皇御手植の栢樹を始め、老樹叢叢、施設の仕方によつては、野鳥も相當集合する事と想つた。

出席者氏名 (順不同、敬稱略)

- 寺尾豊一、池田友司、小谷廓然、畝田政一、岡田稔、大中啓助、村井米治、下野豊治、慰斗美代子、飯島靖司、藤原勢士、大島武雄、若山旅人、渡邊誠、谷口澄、寺内晴直、岩尾義一、中井榮三、東光治、辻登施夫、古橋太三、寺方徹、山口竹治郎、山口隆一、山口愛子、山口洋三、清水彌一、山崎静子、野田幸藏、吉田耕吾、山下三之助、宮井悦郎、宮井巖、佐々木健治、後藤康男、岩田正俊、栗木徳一、同美喜子、堀田光鴻、東野光治、吉田正光、奈倉正夫、松井幸士、村田文三郎、同隆子、笠井常子、堀勝、松山確郎、中井茂彦、濱田久一、池上市太郎、尼崎芳雄、磯部正聰、石西宏充、喜多慶治、他四名、大浦彌太郎、土橋好幸、林克己、木田末治、葛與信、村上一郎、堀内匡好、伊崎定、山口諒司、森田支部長、森田由喜子、藤田利子、榎本佳樹、守山鴻三、廣澤亮爾、平松道夫、外お子さん達拾數名、